

「あの『九月十一日』の事件、あのイメージは、あと千年の関係を私に呼び覚ました。新しいミレニアム。と同時に、昔の千年、五千年も呼び覚ました。あれ『バベルの塔』を思い出させるでしょう。

これまで、『人類五千年』といったり、『千年先』なんていわれても、抽象的な概念でね、なんか進歩的な大学の教授のいうような感じで、まったく血肉に響かなかった。ところが、あの事件では、『あつ』と思ってる、千年先がぶわつと立ち上がったってきたんだ」(末・三五三)。

「私が、あの時喚起されたイメージは、いままで自分の中で抽象語でしかなかった『ミレニアム』というのが、パツと現れた。その時、今日のテーマである『私の坐る場所』は、もし明日死ぬとしても、やっぱり千年生きる価値というものによって生きたいと私は思った」(末・三五四)。

そしてこれに関連して鶴見の脳裏に登ったとするのが、原爆についてであつた。

「私が考えたのは、原爆。原爆を思い出した。原爆の嘘を、この先千年、アメリカは隠し通せるか。つまり、こういうことなんです。アメリカには、戦略爆撃調査団というのがあつて、日本の上をいつも平気で飛んでいたから、日本の工業力が全滅したということは知ってたんです。(中略) どうして原爆を落としたのか。アメリカは、アメリカ兵の生命を救うためとか、接戦だったとか、嘘を書いたんだけど、理由は一つしかないんだ。あれだけたくさん金を使つたんだから、どこかでちゃんとその効果を見せないと、議会が承知しない。つまり、金のためなんです。でも、そのことをアメリカはいえない。しかし、千年、いえないだろうか。それが私の疑問なんだ。そういうことを、あの、ビルの崩壊する映像を見ながら考えた」(末・三五三～三五四)。

ここで鶴見は、『バベルの塔』、『原爆』、『イスラムとキリスト教の問題を絡めてミレニアムに行き着くわけであるが、これに同感する形で橋本が、自分の対象分野である『源氏物語』について語る。

「橋本 そういうことでは、偶然というわけではないんですが、僕、『源氏物語』をやってみました。あれがだいたい、いまから千年前くらいだから、その『源氏』からあとが千年紀なんだな、というのは、二十世紀の終わりくらいに思つたんです。そうだとすると、一部の特権階級の文化が都で貴族を作り、『あとの全部は地方』という形で、都以外はなくても同じ、という

ことになつてた。その地方から武士が出てきて、それが決着のつけ方がわからないまま、ぐるぐる回つている、それが、この千年だったのかもしれない、という気はしましたけど」(末・三五六)。

近代国民国家への批判は、かくして千年という時間の視点を持って進められるべき事柄になるが、それは鶴見自身の側では、ミレニアムをいかに続けて生きるかという問題となる。このことを再び、橋本との対話の中から引用しよう。

「鶴見 (前略) 橋本さんの方法は、編み直しの方法。自分の前の千年、目前にある次の千年に向けて、というだけでなく、自分の後ろの千年が残してくれたものを、現在の自分の必要に応じて編み直す、ということですね。そこには長い修練の歴史がある。

橋本 千年というのは確かに大きな塊ですけど、いまより前の千年というのは、千年で完結しているわけじゃない、藤原摂関家の時代にいたるまでの日本列島の千年というのもあるわけで、そう考えてくると、千年というのは大きな流れじゃないともいえる。(中略) そこで僕が何を考えるかといえば、明日自分が生きていくことは今日のうちにわかるけれど、あさつてのことはよくわからないから、あさつてのことがわかるように、今日のことを考えよう、ということなんです。そうすると、あさつては、いつの間にか千年くらい続いているだろうと思つて。

で、いま考えているのはとりあえず自分一人のことだけれど、明日になったらもう一人『自分と関係ある人間』が出てくるかもしれないから、明日他人が現れた時に、その他人と合意がとれるような方向であさつてのことを考えよう、それくらいのことなんです」(末・三七七～三七八)。

これと同様なことを鶴見は、別の個所で述べる。

「(前略) 私は明日死ぬかもしれないが、しかし、新しいミレニアムを生きていくような価値によって、明日までの二十四時間を生きたいと思うようになって。それじゃ、その価値って何つていわれるとね。一つは、私は生きたい。これは、原罪を含んでいる。私が生きるということは、ほかのいろんなものを殺してるんだから。その次に、私個人じゃ生きられないから、何人かの人と一緒に助け合いながら生きたい。その何人かの人と助け合いながら、というのが、点線で地球全体につながるんだ。だからこれは、地球の資源の再配分の問題と、論理的には結びついている。結局、あの同時多発テロというのは、(中略)

悲劇をつくりだして、それが二十世紀の歴史の破綻の原因です」(グ・三〇)。
鶴見は、国民国家の問題点と歴史を集約して、日本の場合を次のように述べる。

「日本も、明治国家をつくるのは一八六八年で、一九〇五年が日露戦争の終わりです。十九世紀に明治国家が始まったときは、たくさんの新しい幸福をもたらしたし、よかったです。二十世紀に入ってからのはほかの国々と同様に、国民国家という単位そのものに綻びがあり、いろいろな被害をもたらした。ユダヤ人のホロコーストとか、ジプシーの虐殺というような六〇〇万人単位、五〇万人単位の虐殺というのは、日本にはないけれど、それに近いものがあった、大変な数の人間が中国人、日本人とも死んでいます」(グ・三〇～三一)。

前述の戦争相手に対する歌に例をとれば、明治国家の始めには、敵の大将を美化し、敵の兵隊を美化していたのが、「第二次大戦での日本はそこからずり落ちてしまった。『出てこいニミッツ、マッカーサー、出てくりや地獄にさか落とし』と歌って、本当にマッカーサーが上陸してきたら平伏しちゃうんだから、その凄まじさに、ほとんど感動すらおぼえる」(グ・三三)。こう語ることで鶴見は、国民国家への根本的な疑義を打ち出す。

「ですから、二十世紀から何を学ぶかといえ、国民国家という単位そのものを疑わなければいけないときが来たということだと思ふ。これがいつ解決するか、二十一世紀に希望をつなぐとか、そんなことは全然分らないですけれども、少なくとも二十世紀はそういう意味で残酷な歴史であって、国民国家という考え方を明治初年の人のようにいいようには思えない。そのことが問題なのであり、その現実のなかに平和憲法はあると思ふんですよ」(グ・三二)。

鶴見はさらに、作家橋本治との対話の中で、このような国民国家に対する見直しを、「編み直し」という言葉で表現する。

「古いセーターが、うまく着こなせなくなった。自分に体型も変わった。そこで、これを全部糸にしちゃって、もういっぺん編み直す。それが必要なんですね、いま。国会議員とか大臣が『明治は偉大だった。明治に帰れ』なんていつてるけれど、明治国家なんて、たかだか百五十年足らずでしょう。もっと遡って、明治国家以前に戻って編み直しをしなきゃいけない。そうすればもう少し有効なこともできると思うけれど、そういうことをいう人は少ないね」②。

この視点から明治国家から続いている現在の型を打ち破らなければなら

い、と鶴見は強調する。

「明治国家をキチンとゆつくり解体するということができない。うっかりすると、まだ使えると思っている。その延長線上で、戦後、マッカーサーが来たでしょう。彼は、ひじょうに合理的だったと思うけど、いままでの型を利用して、指導者養成をする。そういうやり方をしたから、同じ仕方で明治国家と同じタイプの官僚が次々出てくる。(後略)」

その型は、一九〇五年に決まったんです。日露戦争の終わり、あそこで型を決めて、マニュアルを作った。そして受験戦争で勝ち残ってくる人を官僚にする。一九〇五年からほとんど百年の型が、いまも続いているわけです。だから、敗戦の一九四五年で解体作業が終わったと誤認している人たちがいるけど、実はしてないんだ。まだ続いているんだ」(未・三五九～三六〇)。

鶴見のこの指摘は、従来までの主張である「自分を守るものは、個人の内面性であり、自分たちのくらしている土地での自治の慣習である」③、あるいは「個人の想像力と個人の(できていないかぎりでの)しきたり、それぞれの家と土地でのしきたりが、世界国家に対して自由を守るとりとなる。ひとつの世界に達する前に行き悩んでいる、今の個別主権を持つ国家の行きすぎに対して、もつとはつきりとそれぞれの土地のしきたりを守って対抗してゆくことから再出発することが望ましい」④という主張に通じるものであり、その実現が問われているところである。

五

右のように国民国家への疑義を呈した鶴見は、国民国家の百四十年に対して、ミレニアム(千年紀)というものさしを持ち出す。ミレニアムとは、初代キリスト教において広まっていた説であり、その出所は、ヨハネ黙示録にある。地上にキリストが再来して正しき人(義人)を復活させ、キリストが支配する至福の千年が実現するという説であり、キリスト教では正統説とはなっていない。しかしこれを信じるものは続いている。

この発想は、鶴見によれば、九月十一日の事件から出たとされるが、その辺りの事情は、前出の橋本との対話で、次のように語られる。

「ところがアイデンティティという言葉がエリクソンから入ってきたら、突然それが流行ってきた。アイデンティティというのは、もともとは個人のアイデンティティだったのが、あつというまにすり替えられて民族のアイデンティティという話になっちゃうでしょう。アイデンティティという言葉は、その意味で恐ろしいんですよ。だから、アイデンティティのほうは、インテグリティとはちがって、国民のアイデンティティになり得るんですよ。国民というのっぺらぼうのアイデンティティ」(グ・二八―二九)。

国民国家の形成に当たって、それまでの民族、地域等に関わりなく、その国家領域に居住していた人びとが否応なしに国民として組織されていく。従ってそこには従来の伝統、習慣は、隅に追いやられ、近代国家の無性格な国民が徐々に表に出てくることになる。そしてこのときに国家は、教育、制度、イデオロギー等を総動員して国民の形成を強化していく。

「明治の末から日本に近代都市をつくらうとなると、コンクリートからつくろでしょう。コンクリートは、均質なんです。つまり、均質都市をつくって行くでしょう。国民というのも、まずコンクリートという均質の単位をつくることから始めるんです。その国民という均質性への固執が、日本には強く出てきた。しかし、コンクリートはまずいと思う。コンクリートになる前の伝統というものが明治時代にあったので、それを考えていく必要があるのではないか」(グ・二九)。

このように鶴見は、国民以前に存在していた、それぞれの民族、地域、家ごとの伝統があった事実を、すべてコンクリートで塗り固めてしまつて、国民が形成されてしまったことを批判し、その結果出現した国民が、先ほどの高度国防国家↓平和国家↓「普通の国家」と三転した状況を生み出したと指摘する。

「これではどこから見ても、国家の号令ですぐに変わつてしまう程度の国に見えます。この国の内側にいる個人から見れば、自分が国家に何をされるかわからない、相当恐ろしい国家です。こういうふうに生きようと思つていても、国中がまったく変わつてしまうわけですから。ですから、平和国家、平和憲法は個人に支えられたものではないんです。個人対国民という問題がある。そこが問題だと、私には思えます」(グ・二七)。

「平和憲法は占領軍経由で、占領下につくられたということは事実ですが、その十分な受け皿を、日本人は個人としては持つてなかつたということ」

(グ・三八)。

鶴見の言葉の国民に関わる部分——個人対国民の問題——は、きわめて重要なものを含んでいる。というのも、戦前の国民国家が国民自身を抑圧し、甚大な被害を及ぼしたことは周知の事柄であるが、戦後の国民国家が有する平和憲法について右のような発言がなされることは大きな議論の問題となるからである。すなわち平和憲法が、インテグリティによる支えではなく、鶴見の言うように、国民というアイデンティティによる支えによってこれまでやってこれたとすれば、それはまた、「どういふふうにも変えられる鉛細工みたいなアイデンティティ」(グ・三三)によって先行きが不明なものとなるからである。

四

それでは国民国家は、何故形成され、問題を残したのか。鶴見はこう語る。

「国民国家は、十九世紀のヨーロッパでいえば、生きている人間にとつて相当地に幸福をもたらす考え方だった。とくにイタリアではリソルジメントというのがあつて、外国からの支配を排して国民国家をつくつていくわけでしょう」(グ・二九)。

「ところが、国民国家にはもともと綻びがあつた。その綻びは少数民族の中にあつて、いちじるしい形は、オーストリア・ハンガリー帝国、神聖ローマ帝国のなかで虐げられている少数民族です。その火種がボスニア・ヘルツェゴビナから発火したんです」(グ・二九―三〇)。

このように国民国家は、一方において国民の希望であるとともに、その中に少数民族という火種を抱えたまま成立した。しかしこの火種が後に、ヨーロッパ中に燃え広がつて第一次世界大戦になる。この結果、この戦争でヨーロッパは国民国家に対して不信を持ち、絶望した。ところがこれにまだ現実感を持たなかつたアメリカ大統領が「民族自決」を唱え、これが国民国家をまだ支える雰囲気となつて、第一次世界大戦後の平和が出現したのであるが、しかし火種はそのまま残ることになる。そして国民国家のほうでは、国民をより均質・純粋化していく道を進む。

「これが第二次世界大戦の導火線になる。ですから、十九世紀はともかく二十世紀というのは国民国家を純粋化していくというヒトラーなんかの運動が

二

鶴見は国民国家について、次のように総括的に語る。

「私の子どもの頃は、日本は国民精神総動員で、国民は高度国防国家のために一所懸命努力することになっていった。そして一九四五年以後は平和国家、文化国家になった。戦争を放棄したから、もう戦争はあり得ない。そう信じて国民はまたいつそう努力した。」

そして今度は『普通の国家』になって、また日本の防備とガイドラインによって、周りの国々とも軍事的にも関係をつくっていくことになる。そのどの場合にも単位は国民なんです。国民という単位を問題にしなればいけないと思います」(グ・二六〇)。

ここで鶴見は、われわれが当然の事と見なしている国民国家、国民に対して、根本的な疑義をはさむ。すなわち高度国防国家→平和国家→「普通の国家」と三転した状況の根源を「日本では明治半ばから学校制度ができて、いちばん頂上にある東京帝国大学ではドイツ式の純粹の思想方式で、国家理念に自分を近づけるという考え方が出てきた」(グ・二六〇～二七)というところに見出す。しかしながらこの思考方式は、明治国家の創設期から存在したものではなく、創設期にはまだそれ以前の考え方が残っていたとする。鶴見によればその例は、明治政府最初の戦争である西南戦争時の軍歌に表れている。

「明治国家は、はじめから悪いのではなくて、つくるときは大変いいものだったんですよ。最初の明治国家の遭遇した戦争をうたった『抜刀隊』では、『われは官軍わが敵は』と言い、『敵の大將たるものは、古今無双の英雄で・・・』という。私はそこに感激するんです。敵を小さくしてない。『これに従うつわものは・・・』敵にですよ。』ともに剽悍決死の士・・・』と、敵は一騎当千の決死の兵隊だといっている。敵の大將西郷南洲を美化するし、敵の兵隊も美化するんです。これはすごい歌です」(グ・三二一～三三三)。

しかしこのような伝統は、日本が国民という単位になっていくに従って、様々な特徴が消滅して、一色に染められていく。このことを今から見れば、国民一色という視点では、右も左も似ている、と指摘する。

「日本には『いろはがるた』風の折衷的な考え方の伝統が明治以前からずっとあったわけですが、国家がそれと無関係な純粹主義になっていくわけです。

高度国防国家を国民という単位全部が一億一心になってやっていった。それまでの明治憲法を重んじる方式と、敗戦後の平和を重んじる方式とあわせて一四〇年を見ると、通時的にはいろはがるたのつぎはぎの形になっていますが、共時的にはいろはがるたふうから遠い形です」(グ・二七)。

このところでの鶴見の指摘には、それぞれの時代に、「共時的には」という点から見れば、現象形態としては通底するものが存在しているのであり、それは国民というものが持つ特徴として現われているとされる。

三

ここで鶴見が持ち出した問題は、国民というものをどのように考えるかという点である。国民には、高度国防国家の方式と平和国家の方式に通底する特徴がそこに見出される。そこには、「平和国家、平和憲法は個人に支えられたものではないんです。個人対国民という問題がある。そこが問題だと、私には思えます」(グ・二七)という鶴見の問題意識がある。

これについて鶴見は、「インテグリティ」(integrity)という語を持ち出す。「インテグリティ」とは、本来、正義、誠実、全体性、無欠性などと訳されるが、鶴見はこの語について、次のように語る。

「インテグリティという言葉は、おそらく明治半ばから英文学なんかで接触していたと思うんですが、日本語には置き換えることができなくて、後からきたアイデンティティほどにはついに流行らなかつたんです。どういうばらばらなものがあつても、自分という個人は変わらないし、それが自分という個人のかなかに消化されて、ひとつのまとまりになっていくという、現在の学問から見ると少し時代おくれの言葉なんです」(グ・二七～二八)。

「それは、明治以前で言えば、『あの村の人はこういう人だ』とか、『あの土地の人はこういう人だ』『あの家の人はこういう人だ』というふうなものが、インテグリティなんです」(同)。

右にあげたインテグリティとは、つまるところ国民国家に組み込まれる以前の人びとの伝統、それぞれの家と土地における習慣、しきたりに関わる。ところが国民国家は、これとは関係なしに人びとを組み込んでいく。その象徴的な語とされるのが、「アイデンティティ」という言葉である。

鶴見俊輔と自立の思想

Shunsuke TSURUMI's Independent Viewpoint

Tsuneyuki KIMURA

木村倫幸

一

「千年のものさしをもって、人間としてくらしてゆきたい。そういう生き方は、現代にもあるはずだ」①

第二次世界大戦後の日本社会で一貫して民主主義を擁護してきた思想家、鶴見俊輔が二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ後の座談会で語った言葉である。鶴見はこれまで、「思想の科学」、「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」、「反戦自衛官ホットライン」、「九条の会」等の運動を通じて、国家権力に対する抵抗の思想を「私的な根」を根拠に堅持し続けてきた。その影響は大きく、現在なお現役の思想家としての地位を占めている。

その鶴見が、九・一一テロを境に、ミレニアム（千年紀）というものさしを使って時代を考察することを強調し始めた。これについて鶴見は、こう語る。

「なぜこの尺度が私にとって新しいかという点、二〇〇一年九月十一日が突如に私の中にミレニアム（千年紀）という言葉を呼び起こしたからである。世界貿易センタービルの崩壊は、旧約聖書のバベルの塔崩壊が眼の前でおこったように、数千年をとびこえる実感を私にあたえた」（グ・二二）。

ここから鶴見は、自分の老いと重ね合わせを通じて、近代国家としての明治国家Ⅱ 国民国家を超える視点を導き出す。そしてそれはストレートに明治国家とそれを構成する国民の概念、その特質とされてきた進歩の概念への疑いへと展開される。

「私は老人である。現在八十歳。ここまで老いてくる途上で、こどものころよくあった老人を思い出し、自分の身ぶりがこの老人たちに似て来たことを感じた。その人たちは明治国家のできる前に生まれそだった人たちであり、明治国家の百四十年をふるしきでつむような身ぶりをもっていた。はたして明治以後の百四十年は進歩だけだったのか。私はそれをつよくうたがうようになつた。私の使っている日本語にしても、国語となった百四十年よりも前に、千年をこえる日本語としての生命をもっている。その日本語で書かれた『万葉集』を、私たちは読むことができ、そらんじることができる」（グ・二二～二三）。

小論は、この鶴見のミレニアムのものさしと、近代国家としての明治国家Ⅱ 国民国家並びにそれを構成する国民への批判の視点を検討する。